金達寿

太白山脈

筑摩書房

太白山脈

昭和四十四年五月三十日　第一刷　発行

定価　八八〇円

著者　金　達　寿

発行者　竹之内　静雄

発行所　株式会社　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二の八
郵便番号　一〇一―九一
振替　東京　四一二一三
電話東京（二九一）七六五一（代表）
印刷・三松堂印刷　製本・山見製本

© 金 1969　CS 80043

目次

第一章……三
第二章……三四
第三章……六九
第四章……一一
第五章……一四九
第六章……一九〇
第七章……二三六
第八章……二七八
第九章……三二八
第十章……三六一
第十一章……四〇五
第十二章……四五〇
あとがき

太白山脉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

一

夜が明けはじめた。劉連淑はふと目をさまし、見ると、明りとりの窓が白んで来ていた。彼女ははっとなったように、寝床のうえへ半身をおこした。

〈それでも〉と、彼女は思った。〈いつの間にか眠ってしまったのだ〉

別に、眠って、わるいというわけではない。だが、彼女はその時間を、刻々を、眠ってすごしてしまうのは惜しいような気がしていたのだった。

劉連淑は、白んでいる、天井に近い二尺四方ばかりの明りとりの窓を見つめていて、白省五のことを考えた。彼もいまごろはこうして目をさまし、白んで来ている明りとりの窓を見つめながら、きょうという日を迎えているのであろうか、と。

彼女は、監獄の房の明りとり窓がどうなっているか、見たことはなかった。が、白省五の入れられている房に、それがあるということは知っていた。いつだったか、面会に行ったとき、それを訊いてみたのだった。

「窓は、どうなっているのでしょうか。あるのですか」

鉄網越しに対している白省五の顔は、陽にあたらないために、青白くなっていた。

「ああ、あるよ。高いところに――」と、彼は笑った。

「空が、四角に見える」

以来、それからというもの、劉連淑はいま自分が借りて住んでいる部屋が、白省五のいる房とおなじもののように思えて来たのだった。ただ、彼女のばあいは、扉が鍵のかかっている鉄扉ではなく、背をかがめてでもそこから自由に出入りできたが、しかし、なかは小さな明りとりの窓が一つあるきりで、見ようによっては、監獄のそれとほとんどおなじだった。

だが、劉連淑はむしろそのことに、ある慰みを見出して来た。そうして、たった一つきりしかない明りとりの窓を、白省五の入れられているそれとおなじものと見なし、見つめて、きょうまで暮らして来たのだった。

それは、彼女ばかりではない。この国の何千、何万というものが、そうして耐えて来たことであったのだ。

やがて劉連淑は、手早く布団をたたんで部屋のなかを片づけ、服を着かえて外へ出てみた。ひんやりとした新しい空気が張りつめていて、気持ちよかった。が、ソウルの街はまだ、しんと眠ったままだった。

夏の夜の明けるのは早い。だが、まだ午前四時となった

ばかりで、人々が動きはじめるまでにはもう少し間があった。しかし、劉連淑には、それが少し不満のように思えた。だいたい、人々がいつものようにそうして眠っているということが、彼女にはふしぎなような気さえした。

それがいわゆる「嵐のまえのしずけさ」というものであり、爆発を準備している寸前のそれであったことを、劉連淑も間もなく知るのであるが、彼女は何となく、近くにある独立門の方へと歩いて行きながら、きのうの真昼のことを思いだしていた。それからの半日もこのようにしずかだったが、これでいいのだろうか、と彼女は思っていた。

きのう、そのことを知らせてくれたのは母家の中学生、金相寧（キム・サンニョン）だった。劉連淑はこの日も、いつものように病院へ出かけようとして、自分の部屋を出たところだった。彼女は、ソウル駅に近いセブランス病院で、洗濯婦として働いていたのだ。

すると、その彼女を見た金相寧が、母家のなかから走り出て来た。彼は学校の勤労動員で、漢江のどこかで土方のようなことをさせられているとのことだったが、この日は朝から家にいたのである。

「ねえさん」と、金相寧はいつも劉連淑を、そう呼んだ。「どこへ行く？　きょうは休んだ方がいいですよ。ぼくの部屋へ来て下さい。これからいっしょに、正午のラジオを聞きましょう」

「あら、どうして、私はこれから……」

「あら、どうしてじゃないですよ。きょうはこれから、重大ニュースがあるんだ。正午に、日本の天皇が放送をするんです。何だと思う？」

金相寧はそういいながらも、あちこちにと目を光らせていた。自分の家のなかにもかかわらず、――それは、一つのくせのようなものとなっていたのだ。

「日本の天皇が？」と、劉連淑も声をひそめた。「それはどんなこと……」

「いよいよ、戦争はおわりです。そして兄さん、そうだ、兄さんと呼ばして下さい。白省五兄さんも帰って来ますよ。そうしてぼくたちの朝鮮は、独立するんです」

「独立――」

劉連淑は、一瞬、ぼんやりしたように、金相寧を見つめた。ついに、その日が来たというのか。

そこで、彼女も病院へ行くのをやめて、半分は金相寧手製の、そのラジオの前に坐った。一座は、相寧の母親と三人だった。相寧には街の清掃夫として働いていた兄が一人いるが、彼は徴用されて日本へ連行されており、父親は二年まえに亡くなっていた。

ラジオは、金相寧が汗をながしながら一所けんめいになって調節をくりかえしていたが、はじめから雑音に包まれたままだった。そのはげしい雑音からして、いつもとはちがっていた。劉連淑は身じろぎ一つしないで、ラジオをじっと見つめて坐っていた。

やがて正午、はげしい雑音に包まれたなかから、その声が聞えはじめた。金相寧は固くなって坐った膝のうえに両手をおき、じっと下の床の一点を見つめたきりだった。相寧の母親もどこか不安そうな、うつろな目をラジオにすえていた。

「……万世のために泰平を開かん……」

はじめて聞くその声は泣くような、訴えるような、そんなおかしな抑揚であったが、しかしいっていることは、はっきりしていた。と、そのときだった。

「きえッ――!」

突然、金相寧が奇声を発して、すっくと立ち上った。そして彼は、「あっはは……」と乾いた笑い声をあげながら、そのまま外へ飛びだして行ってしまった。

劉連淑はなにかを力いっぱい耐えるようにして、じっと坐ったまま動かなかった。体が大地へめり込むような感覚に、身をまかせていた。

〈省五は、夫は、いまこの放送を聞いただろうか〉と、彼女は思った。

聞いているはずがない。しかしながら、彼も間もなくそのことを知るだろう。

「どうしたえ。戦争、どうなったというのだい?」

一人だけ、日本語を知らない金相寧の母親はまだ事態を知らず、劉連淑に向って訊いた。

「はい」と、劉連淑は目にたまっていた涙を、一度にドタリと床へおとした。「いま、たったいま、戦争がおわったのです。私たちの朝鮮は、これから独立するのです」

それから劉連淑もまた、金相寧のあとを追うようにして、外へ出てみたのだった。もちろん、相寧はどこへ行ったか姿も見えなかったが、仁旺山(インワン)、北漢山(ブクハン)、三角山(サムカク)、南山(ナム)と、ソウルの市街をとり囲んでいる山々は、依然としてそこにそびえ立っていた。

そして真夏の陽のさんさんとふりそそぐソウルの市街も、依然としてそのままだったが、しかし街は、瞬間、死んだようになって打ちしずまっていた。ときたま行きかう人があっても、それはまだ、いまなにがおこったか、その事態を知らないものたちだけだった。

こうして、一九四五年八月十五日のソウルは、しずかに、こともなくその日を送ったのだったが、それが劉連淑には、どうしても物足らなく、不満のように思えてならなかった。

〈きのうは、それでいいとしても〉と、彼女は思った。きょうまでがこんなにしずかなのは、これはいったいどうしたことだろうか、と彼女は考えた。

前方に、うすい朝靄に包まれた独立門が見えて来た。その石造りの独立門は一八九六年、皮肉にも朝鮮の独立が失われようとしていたとき、清国から独立したとして建てられたものだったが、それがきょうはさらにまた、特別な感慨をもって劉連淑には見えた。

門の周囲は、きのうのうちに誰かによって手入れをされ

たらしく、あたり一面、道路までがきれいに掃き清められていた。劉連淑はその道路に立って、強い感慨の迫るままに独立門を見上げていたが、ふと、そばの空地に白く咲きみだれている雑草の花に気がついた。

姫紫苑だった。その花は夏咲きはじめるとやがて散り、散るとともにまた新しい花を咲かせるのだったが、それがいま朝露に濡れて、生き生きとした花弁をそよがせているのであった。

〈ああ、おまえはまた咲いたのか〉と、劉連淑は思った。彼女は、胸のつまるのをおぼえた。

劉連淑は独立門から引き返し、借りている部屋へ戻ると、街の人々から強いイロニーのこもった口調で「皇国臣民」と呼ばれていた趙光瑞が来て待っていた。彼は珍しくいつものボロ服姿ではなく、きょうは、ネクタイこそはしていなかったが、白いワイシャツにりゅうとした背広服をつけて、縁側に腰をおろしていた。

「ああ、おじさん、待っていて下さったんですか。部屋へ上っていて下されればよかったのに——」

劉連淑は、趙光瑞と会ってわかれたのは三日ほどまえだったが、きのうという日をあいだにしていたから、ひどくなつかしいような気がした。

「いやいや、わしはこう見えてもやはり男子の一員じゃから、ひとり居の婦人の部屋へ上り込んでいるというわけにはまいらんのでな。はっはは……」

趙光瑞はあたりによくひびきわたる、明るい声で笑った。そんな彼の笑い声は、劉連淑はこれまで聞いたことがなかったように思った。

「こう見えてもって……」

彼女は趙光瑞の服装の変っているのに気がつき、部屋の扉に手をかけたままのかっこうで、彼の姿を見た。

「はっはは、これか」と趙光瑞は、自分の服に手をやっていった。「きのう、ある男から一着もらい受けた。わしも、きょうは一つ盛装をしてやろうと思ってな」

「よく似合います」

劉連淑はいった。そして、彼女は涙ぐんだ。

「うむ、それからな。わしはあの『皇国臣民』とはもう、きょう限りでおわかれだ。これからはジンチャ（本物）の朝鮮臣民、いや人民だな。はっはは……」

趙光瑞もそういって笑いながら、涙ぐんでいた。

「——」

「いや、これは。——人民となったのはいいが、きのうからは、急にどうも涙もろくなってしもうていかん。わしはいままでは、もう涙など涸れてしまったと思っていたものじゃが……」と趙光瑞は、その晴着の背広の袖を目にあてこすった。「ところで、わしはいまあんたがいないので、実はびっくりしておったところじゃったよ。わしも相当早く来たつもりではあったが、もう西大門へ行ってしまった

かと思うてな」
「西大門へ――」
「そう、西大門刑務所だ。きょうは、これからみんなで出獄する愛国者たちを迎えに行くことになっておる。さあ、あんたもきょうは盛装をして、晴れて夫君を迎えに行くのじゃよ。いや、待てよ、いま何時かな。うむ、まだ六時まえ。とすると、九時からというから、まだ三時間余もあるな。それじゃ一つ、朝飯を何とかして、それを食ってから行くことにするか」
「はい。いま、すぐ用意しますから」
「米はあるのかな。なければ何でもよい。水だけで、真似ごとをするだけでもよい。はっはは……」
趙光瑞はまた、あたりにひびきわたるような声をあげて笑った。まるで、一夜のうちに、すっかり人が変ってしまったようになっていた。
劉連淑はこんなときにと思ってとっておいた白米をとりだし、さっそく朝飯の用意にとりかかった。そのあいだ、趙光瑞は部屋のなかから、外の彼女に向って体を乗りだすようにしながら、きのうからのいろいろな動きについて話した。いまは、誰はばかるところのない大声だった。
彼女は知らなかったが、死んだように沈黙していたと見えたソウルも、底の方ではすでにはげしい渦が巻きおこっていたのだった。その渦巻が突風をおこし、大津波となって襲いかかるのを恐れた朝鮮総督府は、早くも正午の天皇放送以前の十五日午前六時に、在ソウルの進歩的民族主義者であり、独立運動の闘士として知られていた呂運亨（リョウ・ウン・ヒョン）との会談をはじめていた。
これがのちにいわゆる呂運亨＝遠藤政務総監会談というものだったが、遠藤は「戦後の治安維持」を呂運亨に要請したのにたいし、呂は「政治・思想犯」の即時釈放と朝鮮独立のための政治活動の自由、三ヵ月の食糧確保のことなどを要求して、両者の会談は一応の合意をみた。
そこで、一九四四年のはじめごろから、ひそかに朝鮮国内の同志らと地下組織としての建国同盟をつくっていた呂運亨は、ただちにその建国同盟を母体として、早くも十五日のうちには建国準備委員会を結成していた。
そうしてきょう、呂運亨ら幹部たちが先頭に立ち、西大門刑務所から釈放される「政治・思想犯」といわれた愛国者たちを迎えに行くことになっているというのだった。
二日を出ずして、いよいよ行動がはじまったのだった。人々が動きはじめたのである。
劉連淑は趙光瑞からそれを聞きながらも、どうしてだか、体が小きざみにふるえて来てならなかった。彼女は一言もことばを発することができず、ただ、だまってそれを聞いていた。なにかことばを発しては、それがいまは、どこかでウソになるように思われたのだ。
劉連淑はこの二年近くのあいだの、自分の苦労というものを思ってみた。結婚一夜で、翌日ソウル駅頭で白省五が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

逮捕されると、彼女はすぐに白家から追われて出た。はじめは逮捕をまぬがれていた行商人・李漢相の手配で東大門外の清涼里のある家の一間を借りていたが、間もなくその李漢相も北の咸興で逮捕されると、こんどは趙光瑞と白家の執事尹甲徳とのとりはからいで、西大門に近い現在の松月洞に移った。

ここは白省五の入れられている西大門刑務所の近くでもあって、彼女としてそれ以上望むべきことはなかった。したがって、彼女としては、自分の苦労というべきものはなにもなかったとも思えるのである。すべては省五とともにある同志たちの配慮と保護とによって、彼女はこれまでやって来たのだった。

ことに、それまでは見ず知らずの、ふしぎな地下運動者であった趙光瑞の親切は忘れることができない。忘れてはならないと思う。その彼は、きょうもこうして、朝早くからやって来てくれたのである。

劉連淑は、小さな膳をかこんでの趙光瑞との朝食がおわると、その膳を横へやるのといっしょに、彼の前に両手をついた。

「これまで、いろいろと、本当にありがとうございました」

「ああ、いやいや」と趙光瑞は、あわてたように手を振った。「わしはいまごちそうさまをいおうとしたのに、それをささどりしてはいかんよ」

そこへ、彼らの食事のおわるのを見はからっていたらしく、母家の中学生、金相寧が縁側の方へ寄って来た。

「ちょっとお訊きしたいのですが、いいでしょうか」

金相寧は、連淑にではなく、趙光瑞に向っていった。

「ああ、いいですよ。何ですか」

「これですが——」といって、金相寧は手にしていた旗を縁側にひろげた。「お年寄りの人だったら知っていると思うんですが、この四方の卦はこれでいいのでしょうか」

金相寧のひろげた旗は、いま彼が絵の具を使ってつくったばかりの太極旗だった。もとは日本の日の丸の旗で、彼はどこかから聞いて来たものらしく、その日の丸の真ん中にS字の線を引き、一方を藍色で塗りつぶして、四隅に四卦を配した速製のものであった。

「うむ、なるほどな」と、趙光瑞はまず、それがもとは日本の日の丸だったことに感心したらしかった。「わしも実は、ゆうべみんなでたしかめ合ったばかりで、陰陽四卦の配置や方向については、まだよくわからんところもあるが、まあ、きょうのところはこれでいいのではないかの。はっはは……」

「ああ、そうですか。わかりました。どうもありがとう……」

金相寧がそれをいいおわるか、おわらぬかだった。そこにいた三人のものは、急に静止してしまい、そろって耳をかたむけた。たしかに聞えたはずだった。いや、聞える。

「――ドクリプ　マンセイ！（――独立万歳！）」
「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」
それはどこからともなく、まるで地の底から、突然、湧きおこったかのような声であった。早くもソウル市民の示威・決起がはじまったのだった。
「きえッ――！　おくれた！」
金相寧はまた、きのうとおなじような奇声を発し、そこにひろげていた太極旗を引ったくるようにして飛び上った。彼は急いで用意していた竹竿にその旗をくくりつけながら、外へと向って駆けだして行った。
「はっはは……。どれ、わしらも一つ出かけるとするか。わしらもみんなといっしょに市内をひとまわりして、それから西大門刑務所へと行くことにしよう」
趙光瑞はそういって、彼も、もう立ち上っていた。

真夏にしては珍しく、空は低く雲が垂れ込めて曇っていたが、ソウルの街という街、通りという通りは一変してしまっていた。これまでの、日本の植民地下に生れて育ったものには見たこともなかった太極旗、赤旗、旗、旗、……旗の波だった。その旗をかかげた人々が通りを埋めてぎっしりとつまり、そして口々に叫ぶ声は一つだった。
「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」
「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！　マンセイ！　（朝鮮独立万歳！　万歳！）」

ああ、それはどんなひびきを持って、どんな感慨を持って彼らののどから奔り出たものであったろう。感激、感動などといった、そんな生まやさしいことばでいいあらわせるようなものではない。
街の通りは、電車やトラックも走っていた。だが、それらにも太極旗や赤旗を持った人々が鈴なりだった。感電やすべりおちる危険もかまわず、人々は電車の屋根のうえにまでいっぱいだった。そしてひっきりなしに手を打ち振り、叫んだ。
「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！　マンセイ！（朝鮮独立万歳！　万歳！）」
電車はそれらの声とともに、ひっきりなしに警笛を鳴らしていたが、しかし、急いで走るつもりなどは少しもないのだった。運転手や車掌自身汗だらけの顔にいっぱい笑いをうかべ、彼らもときどき窓から両手をさしだしては叫んでいるのだった。
「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」
もちろん切符など、そんなものを売ったり、買ったりするはずがなかった。
この日ばかりは、人々は誰もが、誰とでもが知り合いであり、友人であり、また同志であった。いままでは見たことも会ったこともないものでさえ、いっしょに手をとり合い、抱き合い、そして踊りだした。街角はそれらの人々の歌や踊りで、いくつもの輪がつくられた。

電柱などに貼りだされた、真新しいビラが目につく。それも、おどるような墨書だった。
「わが朝鮮は解放された！　解放された独立民族の矜持をもて！　日本人には手をだすな！」
「日本にまだ、三百万の同胞のいることを忘れるな！」
建国準備委員会の手によって貼りだされたものだったが、しかしその日本人は、きょうはどこにも、一人として見当らなかった。
みな、それぞれにどこかで息をひそめているらしかったが、かりに彼らが見当ったとしても、人々はいまはそれにかかずらっている余ゆうなどなかった。あるいはそれが日本人だったとしても、人々は知らずに彼らとも手をとり合って、踊りだしたにちがいない。人々は、いまは無我夢中だった。よろこびに酔っていた。
そうして、この大群衆はやがて二つの緩慢な奔流となり、この日からの自分たちの指導者をもとめて西大門刑務所、麻浦刑務所へと向って行った。きのう十五日からきょう十六日にかけて、朝鮮全土にわたり、二万数千人の「政治・思想犯」が釈放されることになっていた。
西大門刑務所前はすでに人々でぎっしりとなり、ここも太極旗、赤旗、……「出獄万歳！」などと書いた旗の波であった。白省五にたいする劉連淑のように、出獄するものにたいしては、それぞれの家族や親類縁者などが来ているはずだったが、ひしめき合う人々の波のあいだにあって、どれがそれであるのか、誰もわからなかった。
「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」の叫び声とともに、ここでは「ヂョソン　ヒャッグミョン　マンセイ！（朝鮮革命万歳！）」という声もまじり合い、やがてそれは、「われらの指導者を早くだせ！　早く出てこい！」といういっせいのシュプレヒコールとなって、あたりを圧した。そこへまた、人々があとから、あとからと押しよせてくる。
そんななかにあって、劉連淑はやっと尹甲徳老人の来ているのを見つけたのだったが、
「よかった！　よかったのう」と尹甲徳が連淑の手をとっていっているうちに、二人はたちまちまた人波に呑まれて、はぐれてしまった。劉連淑は、刑務所の鉄門の近くに立っているだけが、やっとだった。
やがて、その西大門刑務所の鉄の門がギイーと、長恨のこもった音をひびかせて開かれはじめた。つづいて門の向うで待機していた青い囚衣のままの出獄者たちが、そこからどっとあふれるようにして出て来た。
と、あたりは一瞬、急にしんとなって、しずまり返ってしまった。と見ると、「ワアッー」という、人々のいっせいの慟哭がそれとかわった。
遠くにあるものは出獄者たちの姿が見えないので、まだ――ヒャッグミョン　マンセイ！（革命万歳！）」のシュプレヒコールをつづけていたが、近くにあったものたちは、

出獄者たちのために道を開きながら、なおも両手で顔をおおったりしていた。老婆など、そこにへたへたと坐り込んでしまって、いまさらのように、あたりはばからず泣きだすものもある。

解放された出獄者たちはいちように痩せ細ってはいたが、しかしまた、いちように元気いっぱいの顔だった。彼らは、そこに泣き伏している老婆を抱きおこしたり、誰彼となく手をとり合ったり、抱き合ったりしていた。そのなかには、みんなとおなじ坊主頭の白省五の姿も見えた。

劉連淑は遠くから、やっと彼の姿を目でとらえただけで、それ以上は、人々の波に押されて進み出ることができなかった。と、彼女は急に強い力で肩を横抱きにされた。趙光瑞だった。

趙は、そのまま彼女をぐいぐいと引っぱって、人波のあいだを抜け出て行った。白省五のところまで近づくと、彼女を、彼に向って思いっきりぶつけるようにした。そして趙は、

「わっはは……」と体をのけぞらせ、大声をあげて笑った。

白省五は、劉連淑を見た。彼女はまるで他人の前に出たようにして、下を向いた。省五は、ゆっくりと彼女の両肩に手をかけ、

「きょうまで、——すまなかった」と、胸に浸み入るような声でいった。二人は、それだけで離れた。

出獄者たちを先頭にした、市中への行進がはじまっていた。劉連淑はまた、人々のなかに呑み込まれた。

「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」や「——ヒヤッグミョン　マンセイ！（革命万歳！）」の声がひときわまた高くなった。人々は声とともに、大波となって揺れ動いて行った。

このとき、西大門刑務所からの出獄者たちのなかには、数人の日本人もまじっていた。大道嗣光もその一人だったが、しかし、興奮の渦のなかで、出獄者どうし以外は、彼らが日本人であることに気づいたものは誰もいなかった。

興奮の渦のなかにあったということもあるが、そのうえ、彼らもまた、

「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」や「ヂョソン　ヒヤッグミョン　マンセイ！（朝鮮革命万歳！）」と朝鮮語で叫び、そして出迎えの朝鮮の民衆と手をとり合い、抱き合ったりしていたからである。彼らは市中行進にも、そのまま朝鮮人出獄者たちといっしょに肩をならべて歩いて行った。

こうして、この日のソウルは朝から時間がたつにしたがい、市民の興奮はますます高まって行ったが、そのうち午後に入ると、どこからともなく、ソ連軍とともに金日成（キム・イルソン）将軍が抗日パルチザン・朝鮮人民革命軍を率いてソウル駅に凱旋し、入城するという報がつたわった。

それは、のちにいろいろな臆測を生んだ一つの風説にすぎなかったが、しかしこの報がいったんつたわると、こん

どは数十万からの群衆が、一度にどっとソウル駅前広場へと向って押しかけた。人々の興奮は、絶頂に達した。

二

ソウル市民のほとんどは、朝から家を出はらっていた。男、女、老人、子どもの区別はなかった。突然のことで、これからはいったいどうなるのか、どうしたらいいかと迷っていたものたちも、「ヂョソン ドクリプ マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」の声を聞きつけると、急に、電気にでもふれたようにわれを忘れて外へ飛びだして行った。

だが、すべて、あらゆるものまでがそうして飛びだして行ったわけではない。なかには終日、家のなかに閉じこもっていたものもあって、李承元（リスウン）もそのうちの一人だった。

李承元もさすがに前夜はよく眠れなかったが、しかし、長いあいだの習慣というものであろうか、朝はいつもの時間どおり目をさまし、そしていつものように、警察部へ出勤しようと仕度をした。

何となく、しぜんに、〈きょうは、制服の方がいいだろう〉と思い、巡査部長の制服をつけて、出かけて行こうとした。が、彼は、日本式となっている家の玄関を一歩出ようとして、思い返した。

「えい、きょうは休みだ」と、彼は部屋へ引返して、着ていた制服を脱いだ。妻の貞順（チョンスン）はただだまったきりで、その制服を片づけ、着替えをさしだした。

「正夫はどうした。まだ寝ているのか」

李承元は、着替えをすますといった。

「光子はもうおきていますけど、正夫はまだ……」

貞順は、答えた。

いずれも、日本式の名前である。兄の正夫は生まれたときは朝鮮式の名をつけられたのだったが、李がリモト（李元）と、いわゆる「創氏改名」をしたときにそうなったのである。そして彼ら夫婦の会話にしても、その「マサオ」「ミツコ」という固有名詞だけは日本語であり、あとは朝鮮語だった。

「夏休みだからといって、いつまでも寝かしておいてはいかんぞ。それからきょうは、外へなど、——どこへも行ってはいかんといっておけ」

李承元は、机を部屋の中央に持ちだし、今朝までのこの数日の新聞や、自分の手帳に書きつけてある情報やをもとにして、あらためてまた戦況の研究をはじめた。戦争はきのうまでおわっていたが、彼にとってはまだつづいていたのだ。

ゆうべまではラジオをひねって放送も聞いていたのだが、彼はただいらいらさせられるばかりだったので、それはやめてしまった。それにラジオを聞いていると、きのうのあの天皇の放送のように、なにがまた飛びだしてくるかわからなかったので、実は、それがこわくもあったのである。

できるだけくわしい情報を、正確に、そして早く知りたいとは思ったが、しかし、考える余ゆうもあたえられず、それをあまり急激に知らされることは、かえって困るとも彼は思っているのだ。それで、急にあわてふためいてはならなかったからである。

〈そうだ〉と、李承元はまた思った。〈決してあわててはいけない。ここは一つ、冷静に、ゆっくりと綿密に考えなくてはいかん〉

李承元は朝鮮地図を持ちだして、新聞記事のそれと照らし合わせたりしはじめた。すると、間もなく、市民のざわついている足音が、彼の家にも聞えて来た。

「ヂョソン　ドクリプ　マンセイ！（朝鮮独立万歳！）」という声をはじめて聞いたときは、彼は思わず立ち上ってしまった。一昨日、――いや、きのう正午までだったとしても、それはもう、その一言だけで充分、逮捕されてしかるべきはずのものだったのだ。

〈うむ、やっぱり変った。ひょっとすると、これは本当に、革命というものじゃないのか？〉と李承元はそう思うと、体にふるえが来た。彼は、暑さのため開け放ってある戸を、急いで全部閉め切ってしまった。恐怖のためもあって、たちまち額には大粒の汗がにじみだして来た。

皮肉なことに、前年、彼は自分の家の一部を日本式に建てなおしたばかりだった。それだったから、朝鮮家屋とはちがって、四方を開け放ったときは涼しいが、それを閉め切ってしまうと、暑くてやりきれないはずだった。

「あの――」と妻の貞順が、となりの朝鮮間の障子を開けていった。「正夫が外へ行ってみたいといって、きかないのですけど」

「いかん！」

李承元は机に向って坐ったなりで、言下にいった。

貞順はだまって、そっと障子を閉めた。向うで、子どもの正夫のなにかいっている声だけが聞える。

〈しかし、待てよ〉と、李承元は思った。〈小学校四年生の子どもと、おれのそれとは何の関係があるんだ。彼は彼、おれはおれではないか。彼はたまたま、おれの子どもとして生れたというだけのことなのだ〉

〈それに――〉と彼は、また思った。〈彼が外へ行ってくれば、街のようすもわかるというものだ〉

「おーい」と、李承元は妻を呼んだ。「正夫を外へだしてやれ。そのかわり、きょうは誰が来ても、おれは留守だといえ」

そして李承元は、閉め切った部屋のなかで汗だくになりながら、さっきからの研究をつづけた。アメリカ軍はまだ遠くの方にあったからということもあるが、彼がもっぱら関心を集中しているのは、すでに北朝鮮にまでやって来ているソ連軍の動向だった。

九日、日本にたいして宣戦布告をしたソ連軍はただちに樺太、満州、朝鮮へと向って進撃を開始したが、たちまち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com